

# 子どもが主体的・協働的に問題解決を行う、体育の授業実践をめざして

～めあて設定・ふりかえり・めあて設定の好循環を生み出す授業の工夫を通して～

横浜国立大学教職大学院 教育学研究科高度教職実践専攻

前田 雄介

## 1. はじめに

体育科・保健体育科のねらいは、心と体を一体としてとらえ、運動や健康・安全についての理解と運動の合理的な実践を通して、積極的に運動に親しむ資質や能力を育てるとともに、健康の保持増進のための実践力の育成と体力の向上を図り、明るく豊かな生活を営む態度を育てることである。しかし文部科学省は、生涯にわたって運動に親しむ資質や能力の育成が十分図られていない例も見られると指摘している。

新学習指導要領では、資質・能力を伸ばすために授業改善が唱われ、その視点として「主体的・対話的で深い学び」の実現が提唱されている。体育においても同様に「主体的・対話的で深い学び」の実現が提唱されている。

## 2. 実習校であるA小学校について

実習校であるA小学校は、生活科・総合的な学習の時間の重点研究に17年間取り組んでおり、児童が自ら課題を見つけ、友や周囲の人と対話を通して協働的に課題を解決していく力が育まれている。しかし体育においては、児童が活動に意欲的に取り組む姿はあるものの、自ら課題を見つけたり、協働的に学んでいたりする姿をあまり見ることができなかった。

## 3. 研究の目的

体育授業における主体的・対話的で深い学びを実現していくために自分にあつためあて設定とそれに基づいたふりかえりを行うことで、充実した活動にするとともに、15分のモジュールを活用し時間を工夫して授業実践を行い、教科の目標②「運動や健康についての自己の課題を見付け、その解決に向けて思考し判断するとともに、他者に伝える力を養う。」を達成したいと考える。

## 4. 研究の方法

A小学校の第4学年の2学級で授業を行う。学級BではA小学校が通常行っている、45分を1時間とした枠組みで単元の授業を行う。

もう1つの学級Cでは、「モジュール」を活用し、60

分を1時間とした枠組みで単元の授業を行う。「モジュール」とは、1授業あたり45分の枠組みを、15分が3つ分と捉えたものである。60分で授業を行うことで、「めあて設定」と「ふりかえり」の時間を確保する。確保した「ふりかえり」の時間は教室で行うこととする。児童同士の対話が促されるのは、チームスポーツであることを鑑み、ボール運動のタワーボールで実践を行う。

実践前後の体育授業の診断的・総括的授業評価の結果の変容、及び児童の学習カードの記述の分析から、研究の評価を行う。

## 5. 結果と考察

授業評価は4つの因子で構成されている。学級Cは全ての因子の評価が上がり、特に因子の1つである「学び方」の因子の評価の上昇が大きかった。

児童の学習カードの記述のカテゴリー分け分析では学級Cの「作戦」「相手チーム」「ルール」に関する記述が多かった。まためあてとふりかえりの関連の割合は差が出なかったが学級Cは具体的に書くことができていた。

こうした結果は、児童同士の対話を通じたふりかえりの活動に時間を割き、また、教室でふりかえりを行ったことによって、考えや意見や気づき、作戦などを「共有する場」を作ることができたからだと考える。対話を通して協働的に問題解決学習を行わせることが体育授業でもできたということだと考えられる。A小学校が、生活科・総合的な学習の時間で行っている学習を、体育の授業でも実践し、児童の思考を深めることができた。

本研究での授業実践を通して、新学習指導要領体育編の教科の目標②「運動や健康についての自己の課題を見付け、その解決に向けて思考し判断するとともに、他者に伝える力を養う。」の達成に近づけたと考える。

## 6. 主な参考文献

文部科学省(2018) 小学校学習指導要領(平成29年告示) 解説体育編  
西口舞,池田拓人(2015) ポートフォリオを活用した小学校体育授業の実践—  
運動有能感に及ぼす影響に着目して—  
高橋健夫,岡出美則,友添秀則,岩田靖(2010) 新版体育科教育学入門